カスタネット通信

カスタネット

2020年11月号

おぎはら耳鼻咽喉科の言語聴覚士(ST)が月1回発行する『カスタネット通信』第6号です。
いよいよ秋本番。紅葉のたよりが聞かれるようになりました。ここ古淵でも、午後の診療が一段落して窓外を見れば、そこはすっかり夜の装い。5月の開院から半年が過ぎたことを、改めて実感するこの頃です。
11月号も絵本特集を続けます。言語聴覚士と絵本の第二弾。またちょっと違った絵本の話を聞いてください。

言語聴覚士(ST)と絵本

　本の扉を開くと向こうは別の世界、知らなかった世界が広がります。自分が行ったことのない場所、見たことのない光景、食べたこともなく香りも知らない料理、、、。読んでいるうちに、本に描かれている街の中を自分が歩いているような気持ちになることもしばしばです。
　とりわけ絵本は、お話の中でうーんと遠くに、そして大きく「跳べる」のが魅力です。急に穴の中に転がり落ちて見知らぬ人にであったり、主人公がとてつもなく大きくなって山を動かしたり、、、。普通に暮らしているだけでは想像もできないことが次々起こって、夢の世界にふわりと導き入れてくれるんですね。
　私たち言語聴覚士は、仕事の中で、いろいろな絵本に出会います。
今回は、発音の練習（これを私たちは「構音訓練」と呼びます）をきっかけに出会った絵本を、皆さんにご紹介したいと思います。

構音の訓練は大人にとってさえ集中が求められ、易しくはありません。いままで意識せずに話し、習慣となっていた発音を修正する作業ですから致し方ないのです。それを少しでも楽しく進めるのが私たちの工夫のしどころ。それを絵本がいっぱい助けてくれます。

お助け絵本 はじめの一歩：「た行」が「か行」に近い音になってしまった子どもたち。少しずつ「た行」の発音を覚えてきたころ、これらの絵本を私の後について音読します。ちゃんと言えた「た」を実感しながら、まるたの変身や帽子のひみつにどきどきはらはら、2人で一緒に夢の時間を過ごします。（これらの本には仲間がいます。みんな素敵ですよ！）

裏へ続く…

発音の誤りは多様です。「か行」や「さ行」がどうしても「た行」になってしまったり、発音の時、ほんとうは口の中央から出てくるはずの空気が、なぜか横から出てきてひずんだ音を作ってしまったり、、、。 治すのはSTの技術、でも最終的に会話で正しい発音を使いこなすのは本人の力。自分で自分の発音を耳でモニターしながら（聞こえない場合は口の中の触覚などで）新しい習慣を定着させていくのです。その時、どれだけ絵本が助けてくれることか！！本当にすごいです。

お助け絵本 少しずつ：
STは発音の習得状態を観察しながら次のステップに進むタイミングを探ります。
リズミカルで繰り返しのある、そして気持ちもほっこりする絵本が頼りになります。

お助け絵本 本格派： **ここからは怒涛の発音練習です。目標音が確実に含まれ、面白い内容と、ある程度の長文で綴られているのが条件です。ストーリーとことばのリズムをともに楽しみながら、覚えるまで声に出して読みこんだ頃には、会話に目標の発音が現れます（これが般化です）。最高に嬉しい訓練の最終段階です。**

子どもとともに、登場人物の気持ちやストーリーの展開を楽しみ共有できるのは、ご褒美のような体験です。大好きな絵本を読み聞かせ、それを発音の練習に活用することができるなんて、STはなんという幸せ者でしょう！

おぎはら耳鼻咽喉科
OGIHARA E.N.T Clinic